
梓「人生相談があるんです」

ニア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

梓「人生相談があるんです」

【Nコード】

N2359U

【作者名】

ニア

【あらすじ】

梓「人生相談があるんです……」

一人放課後残るように言われた律は、梓から「人生相談」を受けることとなる。

部長らしく、たまには後輩の悩みを聞いてやるかと思っていた律だが、その相談内容が思いがけないもので……

「とうわけで律先輩、人生相談に乗って欲しいんですけど……」

「唐突だなあ、オイ……」

黄昏時の音楽準備室。

部活動の後、「ちょっと話したいことがある」ということで梓に呼ばれた私は今、定位置となった椅子に腰掛けながら苦笑いを浮かべる。

(今頃漣達は昇降口かね……)

残るよう言われたのは私だけ、またなんか怒られるようなことでもしたかなと身構えてはいたのだが、引き止めたの本人は私以上に緊張した様子でただ膝の上で両手を握り締め、ようやく出たのが先程の言葉だ。

しかし人生相談とはずいぶん大きく出たな……
だが

「ま、可愛い後輩の頼みだ、お姉さんが何でも聞いてあげよう。んで、どんな悩みだ？悪いが勉強関係は私じゃなくて漣に相談しろよ」

「律先輩に勉強の事なんて相談する訳ないじゃないですか……」

「そりゃ手厳しいことで……」

冗談で言ったつもりだったが、どうやら梓は早く本題に入りたいらしく、軽くあしらわれてしまう。まあ軽口は挟まないでやるか…
気を取りなおして

「実は最近私、なんか変なんです……」

「変……？」

「はい、急に胸がドキドキしたり、頭がぼーっとして何も考えられなくなったり　とにかくおかしいんです」

「……………風邪でもひいたんじゃないのか？」

「そんなんじゃないんですっ!!」

「うおっ、す、すまん……」

即怒られる。

どうもいつもの癖でちゃちゃを入れてしまっな、反省反省……

しかし梓の奴、本気で悩んでいるみたいだな……

梓の表情からは不安な様子が見て取れる。最近音合わせしてもミスが多かったのはこれが原因か……

「私も最初は風邪かなと思って病院に行ったりしました。でもダメなんです！病院に行く時に限って異常がないんですよ！念のため検査しても『問題なし』って言われて……お母さんたちには心配かけたくないし、もう私どうしたらいいか……」

「ふむ…」

何故私に相談を……という疑問はひとまず置いておくとして、さらに詳しく聞いた梓の体に現れた症状をまとめると……

? 普段は健康である。

? 急に胸がドキドキする。

? 頭がぼーっとして周りが見えなくなることもしばしば……

・

・

・

(なんだかそれって……)

と、ここまで話を聞いたところで私の頭はある一つの仮定が浮かんでいた。

確証を得るために私はさらに梓に質問を投げかける。

「ふうん…症状が出るのは学校の中でつてことが多いのか？」

「はい……」

「続けて聞くぞ、ズバリその症状つてのは、特定の人物が居るとき、もしくはその人のことを考えてる時にだけ現れるんじゃないのか？」

「！?よくわかりましたね、確かにそうです…」

……なるほどね、そりやお医者さんでは分からないだろうな……。

梓がかかっているのは……ある意味では不治の病の一種なのだろう。

しかもこの病、私達のような女子高生の間では、ある意味風邪なんかより流行しているんじゃないか？

まあいわゆるその…「恋の病」ってやつではなかるうか？
いや、言ってるすごく恥ずかしいんだが、「特定の人の前」って辺
りがさ、この病気特有の症状なんじゃないかと……

（まあ私はかかったことないからよくは分からないけどさ……）

しかしその罪作りな相手は誰だ？うちの教師陣には恋愛対象になる
ような若い男の先生はいないしな…それでも学校でよく症状が出る
って事は相手は女子生徒か、はたまた女性教諭なのか……？
可能性として高いのはやはり同級生かあるいは…

「なあ、梓。ちなみにその相手ってのは誰なんだ？実は身近な人だ
ったりするんじゃないのか？」

やはり疑うべきは梓に近い人間だろう。同級生との交友関係は分
からないが、同じ部活メンバーの中で考えるなら、候補は唯か漣か
……唯とはよくじゃれ付いてるし、漣のことも結構慕ってるみたい
だしな。

なんてことを考えながら聞いた私の問い掛けに対する梓の答
えは……

「……………」

「ん？何だ、指なんか差して……………」

ただ黙って私を指差す梓。

……………ということとは

「……………へ？私？」

「そうです、律先輩です」

コクン、と頷く梓。

「はいいいっ!?!」

な、何を言ってるんだこいつは　!?!

「だって、律先輩を考えている時だけなんです! 普段は何ともないのに、律先輩のことを思い出すだけでおかしくなっちゃうんです!」

早口でまくし立てる梓。恥ずかしいのかどうかは知らないが、心なしか顔が紅潮し　って!?!

「あゝほら泣くな泣くな!」

「な、泣いてなんかいません!」

「いや、ぐずりながら言ったって説得力無いから……」

感情が高ぶったためか、あるいは我慢の限界を超えたためか　ここまで言つと梓は大声をあげて泣き崩れてしまった……。　そ

10分後

「ご迷惑をおかけいたしました……」

「あゝ気にするなって、それより落ち着いたか？」

「はい、何とか……」

梓が落ち着くまでずいぶん時間がかかってしまった。そういえば梓がこれだけ泣いたのは入部したての退部危機以来か……

（普段から自分を殺して周りに良く気を遣ってるやつだからなあ……

…いや、バンド練習に関しては我を通して怒鳴られてるけどさ）

主に私と唯が。

意識的にしろ無意識にしろ、普段我慢をしてる分溜め込んでたものがあるんだろうよ。

普段好き勝手やっている私には分からないかもしれないけどさ。

「…よし、ならば話を整理してみようか」

また泣き出してしまつ前に……と、私は極めて明るく話を切り出す。

「えーっと、つまり……梓は私のことを考えると胸がドキドキしてしまつと？」

「はい……」

なんつーデリカシーの無い聞き出し方だと自分にツッコミを入れたくなるが、梓も気にしていないようなので続ける。

この辺ムギとかにやらせると上手いんだろうがな……

「部活で直接顔合わせしているとさらにドキドキしちゃつと？」

「はい……」

「ちなみに今私と二人っきりなわけだけど……」

「はい、今もものすごくドキドキしています」

「……………」

自覚がないって恐ろしいな……。

私だったらこんな恥ずかしくてとても素直に答えられないだろう、
だが……

(自覚無いから……自分でも何でなのか分からないからこそ、不安
なんだろうな……)

「……………ちなみに何時からだ？その症状が現れたのは」

「……………はっきりと自覚できたのは……この前律先輩の家に行った時で
しょうか？『課題のお礼だ』って言って言っただけの夕食を作ってくれ
て、ああ……こういう気配りは欠かさな人なんだなって……」

梓は一つ一つ大切な思い出を語るかのように続ける。

「海での合宿の時、不貞腐れていた私を炊きつけて、楽しませてく
れましたよね？入部してすぐの頃、泣き出してしまった私のために
演奏しようって言うてくれましたよね？他にも他にも……思い返せ
ば、私達が気づいていないだけで、律先輩は普段からいろんな場
面で気を使ってくれてたんじゃないかなって思っただけ。そしたら、
ドキが止まらなくなって……」

「……………」

……羞恥プレイか何かですかっ!?

何この娘?何でこんなに自分のことのように嬉しそうに私の事を語ってるわけ!?そんな風に顔を赤らめながらさあ、まるで恋する乙女　いや、『まるで』じゃないんだっけな……

「……………?律先輩?」

しかし、梓は私のことを凄い人だ〜みたいと言ってるけど、私自身にはそんな大したことをした自覚はなくて……例えば家庭科の課題の件にしたって、涙に泣きついた私を『情けない』と思いこそすれ、ここまで慕われるいわれはないと思うんだがな…。

……それより、私はこの梓の悩みにどう答えてやるべきなのだろう?素直に「それは恋だよ」って教えてやるべきか?

ムリムリムリ!私自身が恥ずかしすぎるし、何だか自分が自意識過剰みたいで嫌だ。それに……

(私自身は梓のことをどう思っているんだろう?)

数時間前までの私ならば「後輩」「同じバンドのメンバー」等と即答できていただろう。でも今は……これだけ明確な好意(ただし本人に自覚は無い)を向けられた今、私は同じ回答ができるだろうか?胸の奥がモヤモヤしている。何なんだろうな…この感じ。

「よしっ、よく聞け梓!!」

「っ!?!、急に大声出さないでくださいよ」

「ああすまん、だがな、その症状の原因が分かったぞ」

「本当ですか！？それは一体」

「ああ、その症状の原因は　ズバリこの私だっ！！」

「……………」

沈黙…というか完全に固まる梓　そして……

「はあ？言ってる意味がわかりませんっ！説明してくださいっ！！」
私の言ったことがようやく理解できたのか、眉を吊り上げながら怒り出す梓、さつきまでの元気の無さが嘘のようだ。

「まあ落ち着けて、わけわからないのは分かるが、こればかりは私から説明するわけにはいかないんだ……悪いな」

結局私は、この問題を先延ばしにすることにした。
自分でも変わらない感情を他人に説明されるってのはやはりいい気分がしないだろう。ならば、梓が自然に気がつくまで待つことにした。

「たしかにここで私が事情を説明してやることも出来る。でもそれじゃだめなんだ、梓が自分でこの症状がなんなのか気づかなくちゃ……………」

「それは逃げだ」　と思われてしまうかもしれないが、これは本心からの言葉だった。だってそうだろう？こういうのは他人に言われて気づくものじゃなくって自覚するものだ（　って、唯か

ら借りた漫画に描いてあった)

「もし、今私が言ってることが理解できて……その症状が何なのか分かって、それでも私に相談したいことがあるって時には、遠慮無く言ってくれ、喜んで相談にのってやるからさ……」

(そして その時までには、答えを用意してやるからさ……)

梓はしばらく納得がいかない様子で顔をしかめていたが、私がこれ以上話す気が無いことを悟ったのか、ようやく口を開いてくれた。

「……私としては、この場で説明してもらった方がすっきりするんですが……というか原因が律先輩なら今すぐ治して欲しいんですが……」

「そりゃ確かに。でもここは我慢して私を信じてくれ。きっと梓の悪いようにはしないからさ」

「……はい、わかりました。まあでも、律先輩に話したら何だかすっきりしました。それだけでも進展があったと思うことにします」

「思いつ切り泣いたしな」

「~~~~っ!!このことは、誰にも言わないでくださいねっ!!」

「へへへいへい」

「ちゃんと聞いてください!!」

でも、これがベストの選択だったのかもしれない。この先梓が自分の気持ちに気づくかどうかは分からない。もしかしたら恋愛

感情なんかじゃなく、先輩に対する単なる憧れに過ぎないのかも
れないし（私なんかのどこが？という気もちに変わりはないが…）、
そして、私が梓に対して答えるのかも 何もかも分からない
ままだ。だが、全てはなるべくしてなるだろう。

（なんて楽観的なこと言ってたら、また溻に怒られるのかもし
れないけどさ）

ただ

「まあ何はともあれ、今日はありがとございました、律先輩！」

そう言う梓の笑顔は本当に晴れやかで……ああ、この笑顔を見るた
めならば「人生相談」とやらにのってやるのも悪くないかなって

「 って、これじゃ、私まで変な病気にかかったみたいじゃない
か……」

「はい？」

そつと戸棚のガラスで確認すると、自分の顔が紅潮していることが
分かる。梓の気に私も当てられたかな……どうやら胸の鼓動も早く
なっているように感じる。

（ドキドキしている……私が？……梓の笑顔を見て？）

「律先輩……？」

後輩の笑顔にドキドキが止まらないなんて恥ずかしすぎる、梓には失礼かもしれないが、そんな情けない姿を見せるわけにはいかない。だから私はこう思ったんだ、他人からしたら「照れ隠し」なんて言われてしまうのかもけれど、『私の後輩がこんなに可愛いわけがない』　　っとな。

(後書き)

弟と友達に触発されてこの度書くこととなりました。

時間の許す限りは執筆を続けていきたいと思っておりますので、よろしく
お願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2359u/>

梓「人生相談があるんです」

2011年7月14日15時01分発行